

新幹線の「顔」を作る匠の技 打ち出し板金を残したい



株式会社山下工業所 社長 山下 竜登 《山口県下松市》

鉄板の切粉と汗が混ざった父親の匂い

それは、鉄板の切粉と汗、溶接の煙が混ざり合った匂いだった。少年にとって快適な匂いではなかったが、うれしかった。父親との久しぶりのキャッチボール。空は夕暮れに染まりかけていたが、できることなら日が落ちてほしくなかった。「懐かしい父のランニングシャツの匂いが、車両づくりの現場の匂いと分かったのは、家業を継ぐために帰国してからですね」

企業家は少年時代の思い出を振り返りながら語った。山口県下松市にある株式会社山下工業所の山下竜登社長（48歳）である。人懐っこい、温和な表情が印象的だ。

板金技能を磨き続けた父

山下社長は、東海道新幹線が開通し、東京オリンピックが開催された一九六四（昭和二十九）年に下松市で生まれた。父親の清登氏（現山下工業所相談役）は、当時、二十八歳。前年に会社を立ち上げたばかりであった。

清登氏は、戦後、市内の小さな自動車修理の町工場に入り、金属板をハンマーで叩いて三次元自由曲面を作り出す「打ち出し板金」と呼ばれる職人技を

身につけた。先輩から教えられるのではなく、壊れたボディーやバンパーをハンマーで叩きながら修理していく先輩の手さばきをじっくり見ながら、技を盗んでいたのだ。

下松市は、大正時代に操業を開始した日立製作所笠戸工場が中核となつて発展した、全国でも数少ない鉄道車両製造の町である。清登氏が働く町工場に、日立製作所からインド向け蒸気機関車の部品製作の仕事が舞い込んできたのは、一九五四（昭和二十九）年であった。これが、その後、半世紀以上にわたる清登氏と鉄道車両部品作りとの出会いである。

高い技術力を生かして創業

清登氏は当時まだ十代の若者であったが、打ち出して作り上げた複雑形状の車両部品の出来の良さは、関係者から高く評価された。

勤めていた町工場が廃業してからも、形式上、日立製作所の協力会社の一つに籍をおく自営業者になり、日立製作所構内で板金作業に従事した。在来線の特急電車や世界初の本格的な旅客輸送のための跨座式モノレール（犬山パークラインモノレールカー・愛知県）、東海道新幹線の試作車両などの流線形の先頭構体、鉄道車両の「顔」に相当する

部分の製作に携わった。

この時期、「正社員にならないか」との誘いも受けたが清登氏は断っている。

「当初は、一匹狼で気楽にやってみていたの思いがあったようですが、その後、『自分で会社をつくりたい』という考えに変わり、一九六三（昭和三十八）年に、日立さんの強力な後押しをいただいて、山下組を創業しました」

二十八歳での創業であった。初仕事は東海道新幹線の開業用生産車向け十二両分の「顔」。翌年十月の開業に間に合わせるため、清登氏は自慢の職人を集め、また、新人を指導しながら、ひたすらハンマーを振り続けた。

「自ら現場で作業しながら、同時に、後進の技術指導もしなければなりません。日立さんとの商談、日程調整もあります。徹夜したり、夜遅くまでハンマーを振り続けたことも度々あったと聞きます。子どもも時分は高度成長の真っ只中で、どこの家でも似たようなものだったと思いますが、同じ屋根の下で暮らして



東海道新幹線試乗車両の「顔」
（写真提供：山下工業所）

profile

山下 竜登 やました・たつと

1964年山口県下松市生まれ。大学卒業後、金融機関に就職。駐在員として海外での事業展開に携わる。家業継承のため2006年に帰国、2007年山下工業所に入社し専務に就任。2009年社長就任。山下工業所は、資本金1,000万円、従業員数35名、売上高は3億5,000万円で、2011年12月、Newsweek日本版の特集「日本を救う中小企業100」において、日本の未来を担う厳選10社に選ばれた。

文：城市 創（鳥根県益田市出身） 写真撮影：村上 征雄（山口県防府市在住）



500系新幹線の「顔」作りの工程（写真提供：山下工業所）

いても父と会うことはありませんでした。母も働いていましたから、祖母が私と妹の面倒をみてくれていて、それが当たり前と受け止めていました」

優れた技能者として製造現場で汗を流しながら、会社の経営にも責任を負う。その苦労は大変なものであった。

筆舌に尽くしがたい苦労

その後、新幹線の延伸、増備により、山下工業所の業務は順調に拡大した。しかし、昭和六十年代に入ると、一九八七（昭和六十二）年の分割民営化を控え、当時の国鉄は新型車両の投入を凍結した。日立製作所への車両発注もほとんどなくなり、山下工業所は創業以来最大の試練に見舞われることになった。この時期を振り返り、清登氏はあ

ていなければ存在しないのと同じである。人材が集まるはずがない。

技の知名度アップに向けてアルミ合金製弦楽器を製作

他の職人技と同じく、打ち出し板金においても技を身につけるには見よう見まねの独習が基本となる。十年かかってやっと駆け出しとされる。第一人者とされる熟練職人は当時六十歳を超えており、意欲ある優秀な若手の採用が最優先の経営課題となっていた。技の知名度の向上、それも圧倒的な向上が必要なることは明白であった。

ヒト、モノ、カネ、どれをとっても制約があるなか、山下社長は、ホームページと会社案内の作成、公的表彰制度へ



ハンマーで三次元自由曲面を作り出す打ち出し板金技術（写真提供：山下工業所）

る雑誌で「筆舌に尽くしがたい苦労があった」と表現している。

一九九〇年代、新たに発足したJR各社は、独自デザインの新しい新幹線と特急電車を次々に投入した。増大する需要に対処するため、清登氏は、日立製作所の技術者と共同で製作方法の見直しを行い、分業体制を確立させるとともに、中間工程に機械を導入することで生産性を大幅に向上させた。

二〇〇〇（平成十二）年の春、JR各社の新幹線車両の更新時期が重なり、超人的なスケジュールをどうにか乗り切った直後、清登氏は体調を崩し、製造現場の一線から退いた。脳血栓だった。

親を助けられないのは男じゃない

山下社長は、一九八二（昭和五十七）年に下松高校を卒業後、早稲田大学に進学した。父から「いずれアジアの時代がくる。将来シンガポール辺りで働けるよう、英語とコンピューター、そして財務を勉強せよ」とアドバイスされ、商学

の応募など、できることから手探りの状態で進めていた。試行錯誤を繰り返すなか、技の知名度を向上させる起爆剤になったのが弦楽器作りであった。優美な曲面を作り出す打ち出し板金の特長を表現するのに最適と発案された。

二〇〇八（平成二十）年三月、アルミ合金製のチェロを作った。「ものづくり日本大賞」の受賞企業を集めた東京の展示会で披露され、山口県内でも報道された。打ち出し板金の存在が地元一般市民の注目を集める、よききっかけになった。翌年には、いずれも世界初となるアルミ合金製のバイオリンとラグネシウム合金製のバイオリンを作った。

これら弦楽器は、同社に二名在籍する「現代の名工」のうちの一人、藤井洋征前第二工場長が中心になって製作。これまでに、チェロは五挺、バイオリンは四挺完成させている。

さらに昨年には、アルミ合金で作った山口国体のマスコットキャラクター「ちよる」を下松市に寄贈した。高さ二メートルを超える大作だ。

実は、「ちよる」には鉄道車両のよくな骨組みがなく、骨組み代わりの「治具」から作る必要があった。それを担ったのは入社半年に満たない鹽見健生さんだった。打ち出しは、現役の「現代の名工」である国村次郎前第一工場長

部に進んだ。進学に際し、家業を継ぐことについては一言もなかったという。

一九八六（昭和六十一）年に大学を卒業後、金融機関に就職。最初の三年半を日本で過ごした後、英国に赴任。その後、駐在員としてオランダ、オーストラリアなど大半を海外で過ごした。

シドニーの現地法人で代表者を務めていた山下社長に「家業を継いで欲しい」という声が届けられたのは、二〇〇六（平成十八）年であった。それまでも父親の体調が万全でないことは漏れ聞いていたものの、家業を継ぐ考えはなかった。それだけ海外での仕事と生活は充実していた。だが、「あのときは切迫感が違った」という。

急遽一時帰国。幼い頃からかわいがってくれた二人の工場長や、清登氏と苦労を共にしてきた日立製作所の社員から早く帰国して父親を助けるように嘆願された。

父が苦労して確立、発展させてきた特殊な技能。四十年以上新幹線の「顔」作りに貢献してきた会社が、後継者不在のために解体されるのは惜しい。経験したことのない製造業の経営ではあるが、会社を救えるのは自分しかない、山下社長は納得した。

「最終的に私の背中を押してくれたのは赴任先のシドニーで出会い一緒になったが担当した。完成の裏に、現役の「現代の名工」と将来の「現代の名工」を目指す新人の二人の尽力があったアルミ合金製のちよるは、「永久に残すべき下松市民共有の宝物（談・井川成正下松市長）」として、後世に伝えられてゆくことになるだろう。

父子での出張講演

山下社長が、現在力を入れているのは清登氏による出張講演である。半世紀にわたる「ものづくり」人生の話だ。講演は「弦楽器の新作発表」「工場見学・打ち出し体験の受入れ」と並び、長期的な人材確保策の一つと位置付けられている。三年前から始め、すでに三十回を超えた。弦楽器を持参し、父子二人で出向く講演だ。

地道な活動ではあるが、打ち出し板金の技への理解者が着実に増えている実感があるのがうれしいという。こうした活動が功を奏し、この二年間では、二十人以上が入社を希望し、十代二人、二十代一人を採用した。つい数年前まで応募する人がいなかったことを考えると、大きな前進だ。

若い職人は私の分身

山下社長は、規模の拡大よりも、高

妻でした。『親が困っているのを助けられないのは、男じゃない。いざとなれば、一緒に何の仕事でもする覚悟があります』と切り切りましたからね」

この組織の未来は暗い

二〇〇六（平成十八）年の晩秋、山下社長は帰国。二〇〇七（平成十九）年一月、山下工業所に入社、専務に就任した。高校卒業後、ほとんど下松に帰ったことがなく、会社の内情は知らなかったが、すぐに強い危機感を抱いた。手仕事の職人技が評価され、存続してきた会社であるのに、技を継ぐ十代、二十代が一人もいなかったのだ。

当初は楽観的であったという。継承者がいなければ採ればよい。その道では、国内最高レベルまで腕を磨き上げたベテラン職人がおり、自分で自分の能力を開発できる職場。すぐに人は集められると考えていた。ところが、手応えはなかった。

「打ち出し板金」「アルミ板をハンマーで叩いて新幹線の顔の部分を作る」と言っても理解してもらえない。打ち出し板金という職人技の存在そのものが、地元においてすら全くといっていいほど知られていないことに気が付き、愕然とした。やりがいのある仕事であっても、知られ

品質な部品を確実に作る少数精鋭の職人の組織を目指している。そのため、器用さと自己開発能力を兼ね備えた優秀な若手を常に追い求めているという。「もっと若い頃に打ち出し板金の真価を知っていたら、私は職人になっていたと思います。父のDNAを受け継ぎながら打ち出し板金との出会いが遅すぎました。現代の名工に認定された皆さんは大抵十代から腕を磨き始めます。若手には私の分身となって腕を磨いてもらいます。まだまだ駆け出しですが、私は、技の存在、真価をできるだけ多くの人に知ってもらおう、技のスポーツスマン、PRの職人になろうと思っています」

工場を案内していた時、そう語りながら、山下社長はハンマーを振り続ける若い職人を見つめていた。そのまなざしからは、多くの先人たちに培われてきた高い技能を受け継ぎながら、ものづくりの夢と可能性を追求しようという強い意志が伝わってくる。



知名度をアップさせたアルミ合金製のチェロ